

内務技監

谷口三郎氏

6月6日内務省土木關係の幹部技術家に大異同が發表されて、辰馬技監が勇退すると同時に、東京土木出張所長の谷口三郎氏が新技監に昇格した。之は内務省の常道であつて何等の奇もないのであるが、然し此常道が中々無圖ケしいものらしい。何しろ此の異動で神戸の寛、大阪の高西、横濱の春木の三所長が勇退したのである。此等の所長は何れも年齢と云ひ手腕力量と云ひこれから大に働くべき國家有用の人材である。さう云へば辰馬氏とても技監を止めねばならぬ程の理由は何ものもないのである。然らば何故此等の人引退したかと云ふと、後進に途を拓くと云ふ位の意味であらう。後進に途を拓くと云ふ事は、役所としては重大な行事であるらしい。

○

辰馬氏は日支事變の時局的に最も多忙な時期を引受けて、然も最も多くの仕事をなし遂げた、若手技監としては近代稀な功勞者である。辰馬氏は滿洲國を始め、北支へ中支へ、南支へ、蒙疆へ皆夫々の適任技術家を送り、而して夫等の技術家は今や獻身的に夫々興亞大業の大任を果しつつある。國內に於ては六縣の土木部昇格をなし、國道關門トンネル工事を促進し、神戸六甲山の大砂防工事や、利根川の大増補工事を起工する迄に運びつけ、其他牧野氏を京都市土木局長に、田邊氏を名古屋水道局長に送る等實に多彩な人事であつた。

辰馬氏は之だけ多くの問題を纏めて仕舞つたのであるから、谷口新技監に残された仕事は何物であるか、一寸と見當がつかない。然し見當がつかないと云ふ事は又無盡藏と云ふ意味にもとられる。實際興亞の大業は今後10年や20年で結末のつくものでなく、土木家としても今後何れ丈の發展と飛躍をしなければ



谷口技監

ならぬか、之は豫想のつかない程大きな問題である、然し之は何うしても日本人がやらねばならぬ仕事のみなのである。

○

谷口新技監は本年54歳であるが、あの光頭と、太い肩と、炯々たる眼光と、堂々たる體軀と、而して悠々として迫らざる態度と、慈味溢るゝ言葉、それは如何にも悟道に入つた禪僧の如き風格がある。實際谷口氏に何の信仰があるか知らないが、青年時代から禪で肚を練つた人でなくてはあの位の溫容と謹嚴は保てないと思ふ。此點は技術家としては珍らしい巨大な存在である。

○

谷口氏は廣島縣の人で、明治40年東大土木科を出で、故廣井勇博士の推薦で北海道廳に入り、小樽築港の防波堤工事や、留萌築港工事に従事し、北海道の技術生活6年の後、内務省に迎へられ、大阪土木出張所技師、本省第一技術課長、東京土木出張所長を経て今日に及ぶ。谷口氏は淀川、利根川の改修工事に最も功績あり、現土木學會副會長であり、著述としては土木施工法に關するものが有名である。